

染香

ぜんこう

福泉寺寺報
令和3年10月
第100号

(毎月1日発行)

ホームページ



孫に会う

じいのマスクは

「炭治郎」

(じいあは、おすこう)

グッドな妻から帽子

先日、福山のマンションにお住まいの門徒さん宅にお盆参りに伺ったときのことです。

駐車場に着いてお宅に向かおうとしたとき、別の階の知らないおじさんが、遠くから身振り手振り私のことを指さして「グッドグッド」と合図を送って来ました。すぐに察しました。私のかぶっている妻から帽子が似合っている。よく言われます。「昭和の映画みたい」と法衣と妻から帽子姿にノスタルジックな心情を重ねられるのです。

門徒さん宅のお参りを終えて外に出ると、また出会いました。今度は駐車場まで下りてきて、どこでそれを買ったのか、駅家の店ならわしは車が無いので買ってきてほしい、わしの部屋は〇号だと言われ、承諾しつつ話を聞いたものの、なかなか図々しいなと思いつつも、なんか憎めない雰囲気のおじさんです。これも何かの縁と思つて、翌日ホームセンターで購入し、言われた部屋のドアノブにかけておきました。



捨てることができないから

夕方、門徒さんから電話がありました。「いま、電話代わりますね」

その後聞こえた声は、昨日のような声ではありませんでした。感激されたような声で「こんなことが本当にあるのかと思いましたが、あなたは仏様の化身です」

と言われました。瞬間、私は恥ずかしさで押しつぶされそうでした。実は、電話をいただくまでの私は「お礼を言われなかつたら、忙しい時期に苦勞した甲斐がない」とか「そんなに親切にしてもらって、あの人はどんな返事をしてくれるだろう」というような卑しい心を少なからず抱いていたからです。これでは、法衣をまとうことすら危うい状況です。

施しは別名「善捨」と言います。自分のしたこと執着せずに、した瞬間に私の思いから離すのです。何気なくかぶっている妻から帽子を縁に、外面では確かめにくい心の部分を洗われたような体験でした。

そして、そんな卑しい心を完全に捨てることが出来ないから、阿弥陀さんとのつながりを持てるのだと味わいました。

(住職)

お経のことば折々

《智慧(ちえ)》

「ありのままにものごとを見る」というのが、仏教の智慧の一般的な説明ですが、言い換えれば「見返りを求めない心」です。また、人間の「知恵」は、賢くなって、頭が上がるものです。一方、仏様の「智慧」は、自分の

お寺は、お葬式やご法事のためにあるように思われがちですが、実は、生きている私たちに智慧を届けるために建てられたものであります。

ちょっと あたまの こりほぐし

なぞなぞです。

ベテラン俳優にお茶はを出すと、
いつも茶柱が立ちます。
なぜでしょう？

答えは裏面です



おてらから

のうららびを増設いたします

今年2月、境内地にマンション型のお墓として「のうららび」を設置いたしました。大変多くの反響をいただきまして、10月末に2つ目を建てます。墓じまいや新規の墓の建立に不安の方は、ぜひご相談くださいませ。

報恩講参り、いたします

10月から1月までの間、報恩講参りをさせていただきます。お勤めは正信偈です。わずかな時間でも、皆さまにお会いできることを心待ちにしております。

福泉寺公式LINE
行事案内を送ります



直ちに來たれ

昭和五十四年にお隠れになった、朝比奈宗源アソノゲンという禅宗のお坊さまがおられました。鎌倉の円覚寺で修行をされてから、美濃の山奥で百日間一人で修行を重ね、その後各地を遍歴しているときに、伊勢の村田静照シヅカテという浄土真宗の和上のお寺にしばらく草履をぬがれました。村田和上は常念仏の人でありまして、もうしようちゅうお念仏をなさっている。そして、時々にはぼそお説教をなさるといふようなお方であったそうです。

夏の夕暮れに村田和上がお風呂で汗を流されたあとに、縁側に腰掛けて夕涼みをされていました。和上は黒いちゃんちゃんこを着ておられたそうです。その和上のところへ行って、朝比奈師がいきなり「和上、アムク、いつも『お浄土へやっつて（連れて行って）もらう、お浄土へやっつてもらう』という言いなされるが、そのお浄土へやっつてもらう時は、どんな格好をして行きなされるんじや」とお聞きになったそうでありまして。早い話が、「お浄土行くときの格好を見せてほしい」とおっしゃったわけですね。すると村田和上は、その黒いちゃんちゃんこのまま、すつと立ち

上がると、「このままやっつてもらいますわいのお」とおっしゃったそうです。

朝比奈宗源師は「この『このままやっつてもらいますわいのお』とおっしゃった言葉がほんまに良かった。禅宗の中にも、あれだけのことをすつと言えぬ人はそうはいない。自分は禅宗の人間だけれども、あのときから親鸞聖人の教えは疑わんようになった」とおっしゃっておられたそうです。



阿弥陀さまは私たちに「格好つけんでもよい、そのままだよ」とおっしゃっています。これが「汝、一心正念にして直ちに來たれ」です。

「この『このままだよ』というお言葉は、お徳の高い村田静照和上でないと言えない言葉ではありません。阿弥陀さまから「汝」とよびかけられている私たち一人ひとりが、言わせていただいていたいいお言葉です。

「阿弥陀さんの前に行ったらね、このままだよってもらいますわいのお」といふ声に出して言うてみなはれ、気持ちよるしいでえ——梯実田和上は、こうお教えくださいといます。

聖野鏡行「あたり前の不思議」探求社

みなさんのリレー閉話

青色 青光

しょうしき しょうこう



バラリンピックが終わりました。スポーツを通して、障がいのある方々の輝きが、皆様のお心にとまったことと思います。

私は障がいのある方々に関わる仕事をし、日々『命の尊さ』を考えさせられます。目も見えない、口もきけない、耳も聴こえない、物事を理解することが難しいが、暑いときには不快さを訴えるために手足を振ってアピールされ、背中にアイヌノンをはせてあげると「ありがどう」と言わんばかりに、抱きついてきて頬をスリスリしてくださいます。どんなに重い障がいがあっても、生きていくために自分なりの伝え方を獲得していかれる「力」に感動するばかりです。また、これまで出来なかったことが出来るようになる『喜びの瞬間』、気持ちが『ネガティブ』から『ポジティブ』に変化する『感動の瞬間』に立ちあえることも、私自身は仕事の楽しさ・喜び・やりがいとなっております。

そもそも「障がい」という語源をたどると、障礙（しょうがい）は、仏教用語として邪魔するなどといった意味で使われ、明治時代にはしょうがいと読まれるようになったと言われています。そして戦後、「障害」と変化し、最近では、「害」という漢字が「公害」や「危害」を与えるといった負のイメージがあることから、「障がい」と表記することが多くなっています。「障害」をどのように表記するかが問題ではなく、表記背景を知ることや一人でも多くの方が障害と社会のあり方について考えるようになることが大切なのではないでしょうか。

障がいというと何か特別なことのように思われがちですが、社会生活の中で困難さがあることが障がいであり、障がい者というのはその困難さに勇敢に立ち向かって生きる挑戦者です。私は仕事を通して、多くの挑戦者達から勇気づけられたり励まされたり、感動をいただいたりして、私自身の「生きる力」を強くしてもらい、心に潤いを与えてもらっていると感じています。バラリンピックだけでなく、一般社会の中で挑戦者達がもっと評価される日がくることを願わずにはおれません。

児玉美佳